

講演「フィールドワークで見た韓国、日本、沖縄」

(要旨、日韓文化交流基金 NEWS51 号に掲載)

2009年5月11日

伊藤亞人氏（早稲田大学アジア研究機構教授）

文化人類学とは何か

私は東京大学での定年後、3年間琉球大学に赴任し、2009年4月から早稲田大学アジア研究機構におります。現在進めているプロジェクトは、北朝鮮における人々の生活の問題です。北朝鮮というと、拉致や、核、ミサイルなどの問題ばかりが目立りますが、そこに生活している人の現実、さまざまな面で周りの東アジアの社会と格差が開いています。それを長期的な日本の政策の中に東アジア地域の問題として位置づけていくことが必要だと考えています。

私は韓国研究を、文化人類学の観点から人間の問題の地域的なケースとして扱っています。同時に、日本との対比や韓国研究を通して見た沖縄を位置づけようと努めてきました。

文化人類学という分野では、人間社会の総体的研究ということを強調しています。多くの学問分野は専門化の中で体系を成り立たせた結果、人間の生活を構成する諸側面の相互関係の全体像は見失われがちです。実際に私自身が韓国のフィールドで研究してきた姿というのは、専門家が専門分野だけやれば済まされるようなものとはかけ離れたものでした。リアルでトータルな生活者の姿を描くために、なんにでも関心を持つべきだというのが人類学の姿勢といえます。

1970年代初めの韓国でのフィールドワーク

私は1971年に初めて韓国に渡って簡単な調査を済州島で行い、1972年から珍島という地域社会で本格的な自分の調査を始めました。その珍島のフィールドだけは今日まで続けており、30数年の間、基礎的なことから始めて、現代的な問題や応用的な問題に徐々に対象を広げてきました。1970年代初めは、日本で韓国研究を手掛けようとする人はそう多くはなく、人類学・民族学でも韓国研究を避けていたといえるかもしれません。当時の朴正熙軍事政権の韓国から距離を置こうとする日本のインテリ、マスコミは多かったのが現実です。

私がフィールドワークを始めたとき、韓国の地方社会の人々は、戦後初めて見る日本の若者に大変関心を持ち、いろんな視線にさらされました。とはいえ、つらいなどと思うこともなく、日常生活は新鮮で、文化人類学的な意味で非常に知的な刺激にも満ちていました。当時の韓国のムラの社会は、徒歩で行ける定期市場ぐらいまでが生活圏で、よほどのことがない限り町には出ませんでした。そのため、ムラの中に生活全体があり、経済、宗教、社会、政治などが、渾然一体となった状態で存在していました。

1972年10月に「シウォルユシン（10月維新）」の事態が起こり、朴正熙大統領が突然戒厳令を出し、国会が閉鎖されました。当時、ムラにはトランジスタラジオのある家庭がず

いぶんありましたが、みんな忙しくて気が付かず、私が日本のラジオのニュースで韓国のことを伝えているのに初めて気付きました。そこで、戒厳令のことをムラの人たちに話したのですが、皆何のことかぴんとこない、というのが現実でした。

ムラでは、協力者でもあり長い友人にもなる朴柱彦氏と出会いました。彼はこちらの趣旨や研究の展望や理念というものを完ぺきに理解し、彼を通していろいろな調査が可能になったといえます。また、私にとってムラは新鮮で不思議な世界だったのと同様に、ムラにとっての私も、異分子であると同時に刺激の材料であり、私を通していろんなことを学ぼうとし、いじめながら一方では守ってくれるという不思議な関係でした。最近研究対象として「交流」を取り上げるようになって、こうしたわれわれの研究も交流の一環なのではないかと気が付きました。私自身も、誰よりも先に韓国との交流をやってきたと思っています。

韓国のユニークさ—父系血縁原理、儒教社会の伝統、人の移動

韓国というフィールドは、人類学的にかなりユニークな面が幾つかあります。例えば、現代の経済発展、都市化、資本主義化にもかかわらず、父系血縁の原理を放棄・否定せず、氏族の祖先を敬い、一族の関係を大事にするという社会は、先進国の中では韓国しかありません。同様のことは、儒教社会の伝統についてもいえます。社会規範における儒学の強調、地方の書堂から中央の成均館に至る教化機関のハイアラーキー、儒者組織の存在など、韓国社会が東アジアの中でも儒教の伝統をいまだに強く維持していることは特筆すべきものといえます。

また、「コリアン・ディアスポラ」という言葉があります。「ディアスポラ」とは、そもそも受動的・強制的な移住、人の移動を指すものですが、現在の韓国では経済発展の進展や政治の抑圧がなくなったにもかかわらず、一層の教育やビジネスの機会を求めて、人々がますます世界中に広がっていくという、移民研究の中でも特異な現象があります。その背景には韓国の民族社会の高い均質性や一極集中があり、そこから生じる新たな差別や対立、競争を避けるために国を離れているということが、ほぼ明らかになりつつあります。



1970年代の韓国のムラ。中央で酒を注がれているのが伊藤先生 写真提供:伊藤亜人

論理体系性の韓国、モノ・様式・由緒の日本

韓国と日本を対比してみたときに、韓国は論理体系性を重視するのに対して、日本は論理体系性よりも、モノ、「型」などと呼ばれる様式、由緒や慣例といった体系化されていないものを重視し、社会を構成しているといえます。韓国の人々は抽象的な観念的な言葉が優越し、論理的な思考をする一方で、実践や経験といったことはややおろそかにされます。学校でも子どもたちの指導性をはぐくむことを重視します。しかし日本では、豊富な経験を基にさまざまな状況に対応する「世話役」や「裏方」であることをよしとし、指導性の強調は希薄であるという違いがあります。韓国の人々にとっては、そのような日本の姿を理解するのはなかなか難しいようです。

私の韓国でのフィールド経験を通して見えてきた日本像とは、言語と論理を駆使して人を説得する指導者が君臨した東アジア文明の中では周縁部にあり、経験と勘といった、多元的で柔軟な思考、蓄積の社会だということです。「文明」とは、個別の経験を超越した普遍的・論理的な体系にリアリティーをおき、それを駆使するエリートが社会を統合してきたもので、文明の周辺部は論理性の欠如のために疎外されるというのが一般的です。日本は東アジアの中で本来ならば疎外される立場になるにもかかわらず、地理的・生態学的な条件の下で、世界の中でもまれなる民俗知識の社会を築いてきたといえますが、論理性を重視する外国の人にとって、このような日本のあり方は分かりにくいように思われます。

「沖縄モデル」—愛郷心、郷土への思いの強さ

沖縄は日本によって併合・編入された王国社会です。琉球大学にいて実感したのは、ほかの地方国立大学が藩政時代からの地域に根差した知の伝統や人材養成の体制を何らかの形で引き継いでいるのに対し、琉球王国はそれを維持できないまま日本に併合・編入されてしまったために、教育・研究体制のインフラに当たる地域との連携が不十分だということです。

しかし別の面では、滅亡した宮廷文化を民間がこれほど継承しながら発展させている社会は、世界的にもまれだと思います。ここで言う宮廷文化とは、琉球の古典音楽です。もともと士族の素養として古典音楽の体系があり、現在民謡で使われる三線はもともと士族の音楽で使われていました。今、沖縄の140万の人口に対して40万丁の三線があり、それだけ多くの人たちが古典音楽を継承しています。非西洋世界で、沖縄以外に民間が宮廷音楽の伝統を維持・伝承しているケースは多くありません。

それから、強い愛郷心と、故郷に帰りたいという気持ちの強さです。この点で、沖縄と韓国は対照的です。韓国は、ふるさとや土地に対するこだわりが低く、いくなれば場所にとらわれない「サイバー人間」的な社会です。それに対して沖縄は、島から離れたら「ウチナンチュ」は成り立ちません。今日、沖縄ほど土地に誇りを持ち、非常にポジティブにとらえている社会は世界でも珍しいかもしれません。沖縄というのは島の社会で、その中に凝縮された人間関係と知識と歴史があります。沖縄の人にとって、ふるさとの伝説と、

生活の装置であるいろんなもの、場所、それから友だちというものが、きわめて重要です。

そこに至るまでは、大変な犠牲も払い、今も経済的には外部に依存して成り立っています。しかし、生活のクオリティーという点では、「沖縄モデル」といえるほど、非常に特殊な目標を達成しているといえるかと思います。そういう点で、沖縄社会もまた東アジアの中で非常にユニークな存在であり、ひとつの究極の生活スタイル、あるいは理想の地域社会を達成しているといえるかもしれません。



1970年代の韓国のムラ 写真提供:伊藤亞人

(了)